

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	エミリー・ディキンソンと『聖書』
Author(s)	小泉, 由美子
Citation	茨城大学人文学部紀要. 人文学科論集(35): 95-107
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/2194
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

エミリー・ディキンソンと『聖書』

小泉 由美子

1. はじめに

Emily Dickinson (1830-66) は、19世紀アメリカ文学を代表する詩人であるが、彼女の詩作品の中で特記すべき点は、男性中心の文化、及び言説を足元から覆す、聖書の書き替えを実践したところにある。特に彼女が生きた19世紀アメリカピューリタニズムの文化的環境の中で、かくも大胆に『聖書』を私の視点により、女性予言者として書き替えたことは、アメリカ女性詩の歴史の中でも注目に値する。

ディキンソン以降、H.D. (1886-1961), Sylvia Plath (1932-63), Anne Sexton (1928-74) 等の女性詩人たちにより、『聖書』は書き替え続けられていくのであるが、まずは最初にエミリー・ディキンソンの独自の読みと、漸新な聖書テキストの書き替えがあった。それ以降のアメリカ女性詩の展開に与えた彼女の影響は計り知れないものがある。(Brown 29-65) その足跡を検証することが、これからのアメリカ女性詩の展開を予想させる作業ともなる。

2. ディキンソンと『聖書』

ディキンソンは1862年に文通を始めたばかりの T.W. Higginson (1823-1911) に宛てた手紙の中で、愛読書の一つとして最後に「ヨハネの黙示録」を挙げている。(JL 261) 彼女の父親は娘に多くの本を買い与えたが、『聖書』以外はあまり読まないようにと指示していた。(JL 261) そのような文化的環境の中で、『聖書』は詩人の想像力の源泉となっていく。特にイエス・キリストの行ないと鮮烈な言葉の集大成である「新約聖書」は、詩人の魂の糧として日々読まれ、彼女の血と肉となり、やがて詩作品として結晶化することとなる。

A Reference Guide to the Bible in Emily Dickinson's Poetry を編集した F.R. Bennett によれば、詩作品のほとんどに『聖書』からの直接的、あるいは間接的引用がみられるという。表面的な引用件数だけを見ても、『聖書』のことは息を吸うように、ディキンソンが日々の生活の中に取り入れていたことがうかがわれる。(Bennett xi) もちろん生涯「異端者」(JL 976) として生き抜いたディキンソンと聖書テキストとの関係は、キリスト教の布教活動とは無縁であった。

ディキンソンは、『聖書』のことは、たとえ話、イメージなどを自分の心の在り方を表現するためのメタファーとして使っていた。『聖書』のことは、詩人の精神世界の中刻をなして

いたといえよう。従って文字通りの引用件数よりも、一つ一つの引用が具体的詩作品の中で、ディキンソンの精神世界の具体的風景として使われ、多くの豊かな意味を付加している様をみることの方が重要なこととなる。

またディキンソンは、生涯、詩作を通し神の存在を知覚しようとした詩人であり、彼女の詩作品は、私から神への問いかけであるとも考えられる。当時の「安息日を教会で過ごす」人々と比較し、「わたしは安息日を家で過ごし/ボボリンクを聖歌隊に/果樹園を会堂のかわりにする」(JP 324)と、彼女は自らの立場を認識していた。制度としての教会に神を見出すことができなかった詩人は、自然の日々移りゆく驚異の世界に、自身の神殿を打ち立て、その庭園に咲き乱れる自然の事物の中に神を見出そうとした。自然の事物に対する執着は、目に見えるものを通して、目に見えないものを見ようとする態度で貫かれている。目に見えないものにこそ、その存在感を感じとり、目に見えるものを凝視して、背後に隠れた精神世界をみようとした。晩年、自然描写は少なくなり、代わりに永遠 (Eternity) という言葉が使われ、手紙には「ヨハネの黙示録」に関する言及が多くみられるようになる。それも抽象概念としてではなく、具象を超えたものへの興味、異なった局面をみたいというディキンソンの強い願望の表れであった。彼女は一貫して神の存在を探求した。

3. 「白熱した魂」

1862年、アメリカ合衆国東部のアマーストにあるディキンソン家の一室で、ディキンソンは「あなたは白熱した魂をごらんになる勇気がおありですか?」と問いかけた。この問いかけが、今だに私たちの心を捕えて離さないのは、この声の持つ一途な情熱と率直さゆえであろう。外側の世界に向かって語られた呼びかけの中でも、この作品ほど力強いトーンで発話されたものは他にない。ディキンソンという詩人が本質的に「私詩人」であったことを考えると、この作品の特異性がみえてくる。

Dare you see a Soul *at the White Heat*?
 Then crouch within the door —
 Red — is the Fire's common tint —
 But when the vivid Ore
 Has vanquished Flame's conditions,
 It quivers from the Forge
 Without a color, but the light
 Of unannointed Blaze.

Least Village has it's Blacksmith
 Whose Anvil's even ring
 Stands symbol for the finer Forge
 That soundless tugs — within —
 Refining these impatient Ores
 With Hammer, and with Blaze
 Until the Designated Light
 Repudiate the Forge — (JP 365)

白熱した魂をごらんになる勇気がおありですか？
 それならドアの内にかがみなさい
 赤は火のふつうの色ですが
 熱気を帯びた金属が
 炎の状態を消してしまうと
 それは炉からゆれてたちのぼる
 色はなく 油も混じらない
 かがやく光で
 どんな小さな村にも鍛冶屋はいる
 金床の単調なひびきは
 内側で音を立てず働いている
 よりすぐれた炉の象徴
 かたくなな金属を
 ハンマーと炎で鍛え
 やがては選ばれた光が
 炉を拒むようになる

当時、詩人の挑発的呼びかけに応じるだけの心の準備ができていた人々が何人いたのかは定かではないが、一行目は「白熱した魂」をみる勇気があるものなどいないという前提で書かれている。一見皮肉な語調と同時に、命懸けで飛び込もうとしている語り手の真しな態度も伝わってくる。当時流行の「感傷派詩人」とは一線を画す、控え目なこの詩人の特質を考えると、ディキンソンらしからぬ情熱がほとぼしる始まりだ。手稿ではスタンザごとに行分けがあったが、最終稿では、行分けが消され、各行は加速度がつき、一気に16行読ませてしまう。この性急さから、当時ディキンソンが直面していた精神的危機がうかがわれる。一行

目から二行目に移る間の長さから、事の深刻さが伝わってくる。

「白熱した魂をごらんになる勇気がおありですか?」との問いかけは、当時の人々の耳には一度も届くことはなかったが、アメリカピューリタン社会に対するディキンソンの果敢な挑戦であった。またディキンソンの側からみると、自分の内なる声に素直に従うことを決意した意志表明の詩でもある。最終稿では、それ以前の恐怖におののく少女というより、自ら選ばれし者といった自負が感じられる。

しかし「何故 私を天国から閉め出すのですか?」(JP 248)、「あの人たちは寒さの中に私を閉じ込めました」(JP 538)、「あの人たちは私を散文の世界に閉じ込めました」(JP 613)と訴えていた少女が、「私を閉め出して下さい」(JP 523)と世間に認められることを断念し、主体的に自らの道を選び取るに至るまでの過程は険しいものであった。

1847年秋、マウント・ホリヨーク女学院において、「キリスト教徒になりたい人は起立しなさい」という院長のことばに、ディキンソンひとりが立とうとしなかった。女学院を中退し、アマーストの自宅に戻ってからも、その態度は変わることがなかった。1850年、アマーストに信仰復興運動がおこった時、ディキンソン家の人々はこぞって洗礼を受けたが、エミリーのみが拒否した。(JL13, 23, 35, 36)「私以外は皆、敬虔なキリスト教徒です」(JL 261)、「魂は自らのあるべき場所を選び、大多数のキリスト教徒たちに向かって戸を閉める」(JP 303)等の発言には、「一人反抗を続け」世間から拒絶され続けた孤高の詩人の姿が浮かび上がる。

ディキンソンは自らの詩才を開花させるため隠遁を決意したが、決意表明の詩とされる303番と365番を比較してみると、詩人の内と外に対する態度の違いが理解できる。

The Soul selects her own Society —

Then — shuts the Door —

To her divine Majority —

Present no more —

Unmoved — she notes the Chariots — pausing —

At her low Gate —

Unmoved — an Emperor be kneeling

Upon her Mat —

I've known her — from an ample nation —

Choose One —

Then — close the Valves of her attention —

Like Stone— (JP 303)

魂は自らの属する場を選ぶ
 それから戸を閉める
 敬虔な多数派の人々の前に
 二度と目見えることはない

その低い門に馬車が停っても
 心を動かさない
 皇帝がその敷物にひざまずいても
 心を動かさない

魂が多くのなかから
 ただ一人を選ぶのを私はみた
 それからその関心の弁を閉ざすのを
 石のように

303番においても、魂の实在が強調され、神の国の代わりに、詩作を通して魂を清めることに専心する決意が語られている。しかしながら303番は静かな断念の詩であるのに対し、365番はスタンザ分けのない激しい格闘の詩だ。前者は外界に自己を閉じる決意を歌った静止の詩とすると、後者は内側に自己を全開していく動的な詩である。

二編の詩における詩人の構えの違いを吟味することによって、365番のメッセージが鮮明にみえてくる。「この世を諦める」(JL 23) ことができず洗礼を拒絶し、破格な詩風ゆえに出版を断念したディキンソンは、生涯自分が自分であるということだけは捨てることができなかった。303番は、世間に受け入れられることを断念した詩であるのに対し、365番は内なる世界、「未知の大陸」(JP 832) を探検する生き方を肯定した詩だ。外に向かって拡散していくのではなく、それと同じくらいの強さで、自分の内側に深く沈潜し、誰にも譲り渡すことのできない絶対的なものを自己の内面に築く重要性を認識した点で、365番は詩人の大きな成長がみられる詩だ。最終稿の「打ち破る」(vanquish) という言葉には、詩人の強い意志と次の段階を目差そうとする勢いが感じられる。「満たした」(sated) を「打ち破った」(vanquished) と書きかえた時点で、詩人の迷いは消えている。それ以降の詩には二度とこの様な心の動揺はみられない。隠遁を決意してからは、「祈り」の代わりに「歌う」ことを天命とし、「この小さな手を一杯広げて/天国をつかもう」(JP 657) とする一貫した姿勢が貫かれている。

365番は魂の精練の過程を鍛冶屋が鉱石を製錬する手順にたとえ、魂が赤から白く純化される様を歌っている。聖化された精神が現世の限界を超え永遠の生命を勝ち得るまで、詩人は詩作を通して魂を精練し続けていこうと決意している。「炉」は精神の錬達場、苦しみの多

い現世，精神の宿る肉体，目に見える物質世界を表わしている。また当時のディキンソンのおかれた状況を考えると，制度としての教会とも取れる。

当時，異端者，破格の韻律を駆使する女性詩人は，アメリカピューリタンの社会に受け入れられる余地は残されていなかった。1862年6月7日付のヒギンソン宛の手紙で，自分の「気まぐれ」な歩調を変えるくらいなら出版を断念し，「今の裸足の階級」にとどまる決意を伝えている。(新倉 144) 1862年頃に書かれた詩の多くは，当時のピューリタン社会が女性に押しつけてくる規範と，独自の道を歩みたいという強い衝動との間で引き裂かれた詩人の苦しみを記録している。またヒギンソン宛の手紙にも，「9月より一恐怖におののいています」(JL 261)，「私は危険にさらされているのです」(JL 265)，「私は君主を持っていませんので，自分を支配することができません。無理にでも制しようとする一私の小さな力が爆発してしまい一私を裸にし，黒焦げにしてしまうのです」(JL 271)と精神的危機を訴えかけている。そして最終的には，男性中心の文化の中で，女性としての体験を言語化しえるという可能性をみせてくれた女性詩人たちに鼓舞され，詩作の道を選ぶこととなったのだ。

この時期ディキンソンは，Elizabeth Barrett Browning (1806-61) の詩に強く共鳴し，「魂の回心」を経験したと記録している。

I think I was enchanted
When first a sombre Girl —
I read that Foreign Lady —
The Dark — felt beautiful —

And whether it was noon at night —
Or only Heaven — at Noon —
For very Lunacy of Light
I had not power to tell —

The Bees — became as Butterflies —
The Butterflies — as Swans —
Approached — and spurned the narrow Grass —
And just the meanest Tunes

That Nature murmured to herself
To keep herself in Cheer —
I took for Giants — practising
Titanic Opera —

The Days — to Mighty Metres stept —

The Homeliest — adorned

As if unto a Jubilee

'Twere suddenly confirmed —

I could not have defined the change —

Conversion of the Mind

Like Sanctifying in the Soul —

Is witnessed — not explained —

'Twas a Divine Insanity —

The Danger to be Sane

Should I again experience —

'Tis Antidote to turn —

To Tomes of solid Witchcraft —

Magicians be asleep —

But Magic — hath an Element

Like Deity — to keep — (JP 593)

私は魔法をかけられていたように思う
初めは陰気な少女だった頃
あの見知らぬ夫人の作品を読んだのだった
その暗さが美しいと感じられた

夜中の昼だったのか
真昼間の天であったのか？
月明かりの狂気に関しては
定義できない

そして自然が自らの慰めのためにささやく
取るに足らぬメロディーさえ
巨人がオペラを練習しているのだと
思えたのだった

日々 力強い韻律に足を踏み入れ
 最も目立たない物が美しさを引き立てられ
 あたかも祝祭に
 突然堅信の秘跡を授けられたかのようだ

私はその変化を定義しえなかった
 精神の回心は
 魂の聖化のように
 実証されるもので 説明はできない

それは神聖な狂気であった
 正気であることの危険を
 私がふたたび
 経験するのであるとしたなら

それは本物の魔術の一冊に戻ることが
 防御となる
 もし魔術者たちが 今眠っていようとも
 魔法は神性のように持続している本質的
 なものなのだ

ディキンソンは、ブラウニング夫人の詩作品を読むことにより感じた強烈な内的体験をキリスト教のメタファーを使って表現している。593番では、ことさら女性詩の特質、優雅さ、深い内的体験、読み終えた後の魂の浄化作用が強調されている。人の魂を解放に導く神秘的力は「本物の魔術の一冊」にたとえられ、詩のことが魂の救済につながるとみなされている。

詩のことが持つ力強さ以上に、ディキンソンはエリザベス・ブラウニング夫人の強靱な精神力、強い意志、自己表現力に心を動かされたようだ。この詩からは、ブラウニング夫人の存在が一人の詩人の内的成長に深く関わった様が伝わってくる。ディキンソンが直観的に理解したブラウニング夫人の資質は、他ならぬ自身に共通するものであった。自分の内側に深く沈潜し、誰にも邪魔されず自己の魂と向き合うことこそ、ブラウニング夫人のような深い内面性と豊かな精神を勝ち得る道であると詩人は確信したに違いない。

4. 「緋色の道」

ディキンソンにとって、神は謎に包まれ、近寄りがたい存在であったが (JL 562)、神の子であるイエス・キリストは「キリストが体験した誘惑は、私たちのものとよく似ている」(JL 36) とし、身近な存在であった。詩作を通し天国にたどりつこうとした殉教者としての詩人は、「苦難の狭い峠道を/それでも殉教者たちは 越えた/その足は 誘惑を踏みつけ/顔は 神を仰いでいた」(JL 251) と自らの運命を、イエス・キリストの受難の生涯に重ねていた。

To put this World down, like a Bundle —
And walk steady, away,
Requires Energy — possibly Agony —
'Tis the Scarlet way

Trodden with straight renunciation
By the Son of God —
Later, his faint Confederates
Justify the Road — (JP 527)

この世を束のように置き
しっかり歩き 去ることは
活力と たぶん苦悩を要する
それは緋色の道

神の子イエスによって
現世を放棄することにより踏み込まれた
後にわずかな賛同者が
その道を正当化することとなる

上記の詩においても、ディキンソンは自らの意志により強い自覚をもって地上を歩く、イエス・キリストの姿に自らの人生を重ねている。

ディキンソンは「新約聖書」から多くのことばやイメージを引いている。「新約聖書」とは、平たくいえばイエスという一個人の行ないのことばの記録である。「求めよ、そうすれ

ば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見出すであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるだろう」（「マタイによる福音書」7章7節）、「狭い門からは入れ」（「マタイによる福音書」7章13節）、「初めにことばがあった」（「ヨハネによる福音書」1章1節）等のディキンソンが好んで使った引用には、それらのことばを強く求めた詩人の姿がみえる。「福音書」のはしばしにちりばめられたイエスのことばは、「どうしたら成長できるか教えて下さいませんか」（JL 261）と問い続けた詩人の心に深くしみ入ったに違いない。ディキンソンは「福音書」に収められた断片化したイエスのことばを自らの直感によってつなぎあわせて、ひとつのまとまりとして理解していたようだ。

ディキンソンは1856年頃から家にこもりがちとなり、1863年頃には白いドレスを着て家にひきこもり誰とも殆ど会わない傾向は習慣化したといわれている。内なる声に耳を傾け、その命じるところにつき従うことにより、それが自らの生き方となっていく。彼女の言う「白の選択」とは、一度はイエス・キリストによって歩かれた「緋色の道」のことであった。

正統派のキリスト教徒たちがディキンソンを不信心と呼ぼうと、彼女は独自のやり方で神をうやまつた。洗礼を拒否した時も、友人宛の手紙の中で、「この非常に大切でまじめな問題について、私がまったく軽率でないことだけは信じて下さい」（JL 20）と訴えているように、彼女は実に誠実に神のことばに向き合った。ピューリタニズムの基本が、『聖書』第1主義であり、神と個人の契約を重視したことを考えると、ディキンソンが自分の内面を日々徹底的に検証し、詩作を通し魂を純化しようとしたことは、ピューリタニズムの正道にかなう行為ともいえよう。（渡辺 18-19）当時の形式的に教会に通っていた人々より、ディキンソンは、よりキリスト教の精神に近かった。もちろんそれは正統派の信者のものではなかったが。

ディキンソンに「不死」(Immortality)という言葉を通し、「目に見えない世界」の重要性を教えたのは、Benjamin Newton (1821-53)であった。(JL 261)「目に見えないものを信じ、復活がより気高く、より祝福されるもの」だと教えられた時、彼女は予言者としての詩人の役割を認識したようだ。(岩田 77) 決して誰にも明け渡すことのない「自分の部屋」を持ち、自分が自分自身であることによってのみ魂の核を燃やし続けることができる。「孤独こそ魂の作り手である」(JP 777)、「魂の最上の瞬間は/独りであるときに現われる」(JP 306)と考えていた詩人にとって、「白の選択」は絶対条件であった。孤独の中でこそ「円柱のような自己」(JP 789)を築くことができ、無限の可能性を秘めた「未開の大陸」を発見しようと信じて疑わなかったディキンソンは、潔く俗世間との関係を断ち、詩と真実に身を献げることとなった。

5. 不滅の言葉

孤独な魂は、自己とこの世の神秘のみに忠実に生きることを決意し、俗世間を無視することから激しい自己表白の場を手に入れ、やがては神をいかようにも語ることのできる自由を

手に入れることとなった。「『聖書』とは年老いた男たちによって書かれた/古くさい一冊です」(JP 1415)とディキンソンは記し、機知を働かせ批判しながら書き替え、自分の目的のため再利用した。(Ostriker 63-67) 手紙には、「サンタクロースの神話は誰が聖書を作ったかの手掛かりをくれる」(JL 794), 「聖書は中心については語るけど、周縁については沈黙している」(JL 950)などの本質的な問い掛けがなされている。「『聖書』のいかなる節にも、私は脅えたことはなかった」(JL 788)と語るディキンソンは、自由に『聖書』を書き替えることができた唯一の19世紀女性詩人であった。(Ostriker 67)

詩神に生涯をささげたディキンソンは、詩の言葉を通し、神の力が授けられると信じていた。一つの思考に一つの言葉しかないと信じて疑わなかった彼女は、唯一無二の表現を徹底的に捜し続けた。(JP 581) しかし詩人を通して神が語られる瞬間はめったにない。ディキンソンが好んで引用した「ヨハネによる福音書」の一章を読むと、言葉に対する詩人の考え方が理解できる。「世の始めに、すでに言葉はおられた。言葉は神とともにおられた。言葉は神であった。この方は世の始めに神とともにおられた。一切のものはこの方によって出来た。出来たものでこの方によらず出来たものは、ただの一つもない。この方は命をもち、この命が人の光であった。この光はいつも暗闇の中に輝いている」、言葉と神とは同じものであり、創られたものはすべて神から生命を得ていて、その生命こそ人間のもつ光なのだ。つまり「白熱した魂」を手に入れることこそ、詩人の役割だとディキンソンは考えていた。

さらに「ヨハネによる福音書」によれば、この世の人々は神の言葉を理解することができなかったもので、神は独り子イエス・キリストをこの世に遣わしたと記されている。「ヨハネによる福音書」1章14節)人は神を直接見ることはできないが、神の子イエスを通し神の恩恵と真理は伝えられると。ディキンソンは「ヨハネによる福音書」を引用し、自らの役割を確認したようだ。神を通し語られる言葉のみ、永遠に生き残る言葉となりうると。

A Word made Flesh is seldom
 And tremblingly partook
 Nor then perhaps reported
 But have I not mistook
 Each one of us has tasted
 With ecstasies of stealth
 The very food debated
 To our specific strength —

A Word that breathes distinctly
 Has not the power to die
 Cohesive as the Spirit
 It may expire if He —
 “Made Flesh and dwelt among us”
 Could condescension be
 Like this consent of Language
 This loved Philology (JP 1651)

受肉した言葉はめったにない
 震えながら分けまえをさずかり
 その時たぶん伝えられはしなかったが
 私たち一人一人が盗品の恍惚を
 味わいはしなかったか
 私たちの特殊な力にとって
 争われたその食べ物を

まぎれもなく息をしている言葉は
 死ぬ力を持たない
 大霊のように粘着性をもつ
 もしキリストが「肉体となって、わたし
 達の中に住んでおられた」としたら
 それも消えるかもしれない
 降臨が言葉の承認の
 ようなものであるならば
 この愛すべき言語学

ディキンソンは「ヨハネによる福音書」1章14節を引用しながらも、二つの点で大きく書き替えている。イエス・キリストの神性ではなく、人間的側面が強調されている点と、間接的にあの世を否定しこの世を肯定しているところは、ディキンソン独自の視点といえよう。彼女にとって詩は神聖な創造物であり、詩人は神の役割を果たし、真実と光を未来永劫に語り伝える存在だった。この世の天国をめざした詩人にとって、あの世の天国は無用のものであったに違いない。

引用文献

- Bennett, Fordyce R. ed. *A Reference Guide to the Bible in Emily Dickinson's Poetry*. London: The Scarecrow Press, Inc. 1997.
- Brown, Amy Benson. *Rewriting the Word: American Women Writers and the Bible*. London: Greenwood Press 1999.
- Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson*, ed. Thomas H. Johnson. 3vols. Cambridge Mass.: Belknap Press of Harvard UP 1955, 1974.
- Dickinson, Emily. *The Letters of Emily Dickinson*, eds. Thomas H. Johnson and T. Ward. 3 Vols. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1958.
- 岩田 典子 『エミリー・ディキンソン: 愛と詩の殉教者』, 創元社 1982.
- 新倉 俊一 『ディキンソン詩集』, 思潮社 1993.
- Ostriker, Alicia Suskin. *Feminist Revision and the Bible*. Oxford & Cambridge: Blackwell Publishers 1993.
- 塚本 虎二 訳 『福音書』, 岩波文庫 1994.
- 渡辺 信二 『アン・ブラッドストリートとエドワード・テイラー』, 松柏社 1998.